

キノコの学名について

稲垣清二郎

著者は昭和9年日本薬学雑誌にカウタケ *Hydnum aspratatum* Berk の有機塩基成分について¹⁾ 投稿せるとき、薬学雑誌の編集委員から種名の *aspratatum* は *imbricatum* ではないかという照会があったので、*imbricatum* はカウタケに近似せるシシタケの学名であってカウタケは *aspratatum* に間違いではないと返事したので薬学雑誌にはその通り記載されたことがあった。著者はその当時キノコの学名は主として川村清一著²⁾ の日本菌類図説(昭和4年大地書院発行)を引用していたのである。

これよりさき白井光太郎博士³⁾ は日本菌類目録を明治38年に初版が発行され、それにはカウタケに *Hydnum aspratatum* Berk と記されているが三宅氏補校の同書第二版(大正6年)には、この外に *Hydnum imbricatum* ともカウタケとして載せてあり、また同書の第三版たる原氏訂正増補のものにも、*Phaeodon aspratatus* カウタケ、*Hydnum imbricatus* カウタケ、カノハナと記されてある。故にこれらの書を参考する人は学名 *Hydnum imbricatus* なる菌をカウタケと誤るおそれがあるが、この菌は香気のあるカウタケとは全く異なる別種のものである。

カウタケ、シシタケ等の属に P. Henning (1900) と安田篤 (1917) らは *Phaeodon* なる属名を用いていた。これは *Phaeodon* は“褐色なる針”の義で、これらの諸菌は針毛が褐色なるにより、*Hydnum* 属より離して、特にこの属の下に分類したのである。すなわちカウタケ、シシタケにはそれぞれ *Phaeodon aspratatus*, *ph. imbricatus* なる学名を与えたが、現在はいずれも *Quelet* によって *Sarcodon* 属に改名されている。

このようなキノコの属名あるいは種名の変遷は日本特産のキノコには特に多いようである。たとえば月夜茸は日本特産の有毒キノコであるが、明治22年東京大学医学部の猪子吉人によって *Pleurotus noctilucens* Inoko としたのが最初であるが、その後 Henning の *P. olearius* (C.D) Gillet, 川村清一の *P. Japonicus* Kawamusa となり、昭和29年アメリカの Rolf Singer によって *Lampteromyces Japonicus* (Kawamura) Singer と

改名され現在にいたっておるのである。

昔から“匂いまつたけ味しめじ”といわれ、しかも日本特産のマツタケやシメジなどは近時非常に少なくなり、著者は池袋より西武池袋線にて約40分位のところにある仏子丘陵にて終戦前から毎年秋に多量採集し戦後40年頃まではつづいて発生したのでキノコ狩としては唯一の魅力な丘陵であったが現在全く発生しなくなった。

マツタケも同様に著者は数年前関西で行なわれた菌学会主催のマツタケ狩に参加したが、同行者ではほんの2~3人、しかも1~2本採集した程度であった。また長野県別所温泉付近のマツタケ狩の場合でもマツタケを採集したものは2~3人という状態であった。しかしその5年程前に著者は厚生省衛生試験所長の松尾仁博士の一行に頼まれ別所温泉付近に同行したときには非常に多量発生し15人位でしたが全員多量採集したところである。

今日われわれの最も日常食用として重要されているキノコとしてはシイタケであろう。これは現在市販されているもの全部が栽培品で年間相当多量生産され輸出量も多いので有望な茸である。

マツタケの学名であるが1886年 Schroet が *Agaricus edodes* としたのが始めて、1899年 P. Henning は *Armillaria edodes* なる学名を与えたがその翌年1900年に *Cortinellus edodes* に変更しており1925年伊藤、今井両氏により *Armillaria matsutake* と改名した。しかし現在では Rolf Singer⁴⁾ (1949) の *Tricholoma matsutake* (S. Ito et Jmai) Sing. が採用されている。

シイタケの学名については、最初1878年イギリスのパークレー-Berkeley が *Agaricus edodes* と命名したのであったが、それを誤ってマツタケの学名として近年まで用いられていた。ただイタリーのサツカルド Saccardo を除いては、この名はマツタケに用いられて、シイタケには田中延次郎によって *Lepiota Shiitake* (1889)、ドイツのヘンニング P. Henning により *Cortinellus Shiitake* (1899) イギリスのラムスボトム Ramsbottom の *Tricholoma Shiitake* (1923) などと属名は各学者の意見で変えられても、シイタケのローマ字綴を付して種名としたものが用いられ、なかんずく *Cortinellus Shiit-*

ake が最も一般に用いられていた。アメリカのロイド Lloyd はこの学名の二語を逆に用い Shiitaker Cortinellus とし本菌に単独の属名を造って用いた。Berkeley によって与えられた Agaricus edodes の種名 edodes は江戸という意味で命名の基準になった標本は今でもロンドン郊外の王立キュー植物園に保存されている。

マツタケの学名はこのように長い間シイタケと混同して edodes の名が使われていたがキュー植物園に保存されている標本を詳しく調べた結果 edodes はシイタケでマツタケでないことがはっきりした。それでマツタケには上記の新しい学名がつけかえられたのである。

アメリカの Rolf Singer は1963年(昭和11年)シイタケの属名をマツオオジタケ属の Lentinus に変え Lentinus Shiitake Sing. としたが、さらに1949年(昭和24年)には L. edodes (Berk) Sing. と改名し現在に至っている。

著者は1961年10月(昭和36年)長野県伊那付近の国有林沢山(2000m)でカウタケおよびそれに近縁せるキノコ3種を採集し本学紀要第3号⁵⁾にこれら4種の茸に対する化学試薬による呈色反応、形態学的所見について報告した。

カウタケ以外の3種の学名は小林義雄博士の同定によるものであり、一部の和名は今関六也先生のご教示をえて、次のように発表した。

1. スミレハリタケには Sarcodon violascens(A. et. s.) Quelet.
2. ニガシシタケ S. amarascens Quet.
3. ケロウジモドキ S. scabripes (peck) Banke

ケロウジモドキは著者の新称である。ケロウジに対してはすでに Karsten が Sarcodon scabrosum なる学名を与えていたので、Banker の S. scabripes (Peck) にケロウジモドキとしたのである。なお scabripes はラテン語の scabris (ザラザラしている) によるものであり、ニガシシタケはラテン語の amarus (ニガイ) を種名として S. amarascens、スミレハリタケの S. violascens もラテン語の viola (スミレ、スミレ色)。カウタケの S. aspratus はラテン語の asper (粗糙の凹凸ある) に起因し、傘の表面の色、平滑あるいは粗糙、苦味などを表わしているが、ニガシシタケの S. amarascens は学名により苦味を有することが特徴であるが、著者の採集したものは香気は強いが苦味がなかったので、このキノコには変種があることが B. Henning⁶⁾ の Handbuch für Pilzfreunden [Vol II. 292 (1971)] に記されているので恐らく変種であったと考えられる。

考察と結論

キノコは植物学的には隠花植物の菌類に属し、大部分は菌類のうちの担子菌類 Basidiomycetes と子の菌類 Ascomycetes で地衣類では、ただ一種イワタケがあるのみである。

G. R. Bisby(1889~1958)が1943年発表したところによると担子菌類13,436種、子の菌類12,120種といっている。この数字から推すとキノコは1万種を下らないことになる。日本には約4,500種といわれ、そのうち学名のあるものは担子菌類1,700種、子の菌類300種合計2,000種といわれ、残りはまだ学名も和名もない現状である。しかし著者がここで論述したように、わが国では最もよく知られ、その上日本特産である食用あるいは有毒キノコのマツタケ、シイタケ、シメジおよび月夜茸の4種はどちらも学名は外国の茸学者によって改名されており、マツタケとシイタケのごときは70年間という長い間混同されていたのが1948年アメリカの R. Singer にて現在の学名に訂正され、また月夜茸にしても明治39年川村清一によって Pleurotus Japonicus なる学名を与えて以来50年もの長い間この学名をわれわれが用いてきたのを、昭和29年 R. Singer が日本に来てこれを持ち帰り Lampteromyces なる新属を設定し、月夜茸に L. Japonicus [Kawamura] Singer と変更したのである。このようにして日本特産の茸が外国の茸学者によって学名の与えられているものが多数あることが想像される。誠に残念なことであるが、その理由は極めて簡単である。それは日本ではキノコ分類学者が僅少であったということである。著者の知っている範囲では明治から大正、昭和の初期にかけて梅村甚太郎、安田篤、川村清一の3氏という誠に淋しいものであった。そしてその当時不明の茸をドイツまたはイギリスに送って鑑定を依頼していたようである。シイタケはロンドンの王立キュー植物園の研究室に、月夜茸はベルリンの市内にある植物園の P. Henning の研究室に送っているが、その当時(明治11, 33年頃)としては輸送に相当の日数がかかったので、キノコの原形も崩れ、その上変色、変質も当然考えられるので、同定も困難であったと想像されるのである。そのよい例として月夜茸は1900年(明治33年)頃ベルリン植物園の P. Henning 教授の研究室に送り鑑定を依頼して Pleurotus olearius (D.C) Gillet と同定されたのである。しかしこの P. olearius (D.C) Gillet は日本にはなく、欧米に発生する茸で、その有毒にして、発光することは月夜茸と同様であるが、茎が細くて長く、傘はロート状で、月夜茸の茎が太くて短かく、傘は

耳状の月夜茸とは全く異なるものである。これなどは長時日の輸送で原形が崩れたため、ただ月夜茸の毒性和発光性という日本からの依頼書によって鑑定した結果生じた誤認と考えられるのである。

日本菌学会は今より20年前に創立されたものだが、創立当時から欧米人が来訪し現在約50人が正会員として入会しており、中には1年あるいは2年間日本に留学し、著者らの採集会にも同行されたものが数名あった。欧米の茸学者は日本のキノコには異常な程関心をもっておるようである。著者は日本菌学会会誌⁷⁾ 1972年に蓼科牧場付近のキノコ5目, 24科, 142種を発表したとき、ノルウェーのオスロ大学とスイスのチューリヒ大学の各植物学教授から日本産のキノコ類を知り嬉しいという鄭重なる礼状を受けた。また小林義雄博士は欧米人から日本のキノコを調べたいから試料の送付を頼まれているが、日本産のものは日本人自からの手で学名をつけるよう研究をやるべきだといわれた。

著者はこのたび、キノコの学名について、特に日本の特産で最もよく知られている食用、有毒茸について述べたのであるが、学名だけでなく、キノコ成分にしても全く不明のものがかなり多数あると考えられる。たとえば

シメジのうま味成分やオオワライタケの幻覚成分についてもほとんど解明されていないのである。

著者としては国立のキノコ研究機関の新設も勿論だが、キノコ学研究を目的とせる青年学徒の続出を望むこと切なるものである。

参 考 文 献

- 1) 薬学雑誌 : Vol. 54 No. 9 824 (1934)
カウタケの有機塩基成分について
- 2) 川村清一 : 日本菌類図説, 大地書院発行, 昭和4年
- 3) 白井光太郎 : 日本菌類目録, 明治38年
- 4) Rolf Singer : The Agaricals in Modern Taxonomy (1949)
- 5) 駒沢女子短期大学紀要 : 稲垣, 小林, コウタケ菌属に関する2~3の知見 Vol. 3 1~7 (昭和44年)
- 6) B. Henning : Handbuch für Pilzfreunden Vol. II 292 (1971)
- 7) 日本菌学会会報 : Vol. 13 No. 3 231~238 (1972)
蓼科牧場付近のキノコ